

## 2018MGC海外演奏旅行〈第2回演奏会〉

- ・日時： 2018年9月16日（日）15：00～17：00
- ・場所： ヴィータウタス・マグヌス大学大講堂、カウナス、リトアニア

9月16日の朝8時に2台のバスに分乗してヴィリニウスを出発、約1時間半のドライブの後、次の目的地であるカウナスに到着。

カウナスは11世紀に建設されたリトアニア第二の都市であるが、第一次世界大戦後、最大の都市で首都であったヴィリニウスがポーランド領となったため、1918年の共和国独立後、ソビエト連邦に併合されるまでの約22年間、リトアニアの首都がこのカウナスに移された。

「命のビザ」を発給した杉原千畝が勤務していた日本領事館がカウナスにあったのはその時期である。

カウナスに到着後、暫く旧市庁舎前広場を散策したのち、その杉原千畝が勤務していた旧日本領事館、現在の杉原千畝記念館を訪問。もっと広い建物を想像していたが、以外と小さく、普通の民家を住居兼領事館として使っていたのだと知った。

私は数年前に唐沢寿明主演で制作された杉原千畝の映画をテレビで観たのだが、舞台となった領事館は結構立派な建物だったのでガイドの岸田さんに聞いたところ、あの映画のロケはカウナスではなくポーランドで行われたのだと教えてくれた。しかし、主演した唐沢寿明と小雪はロケの合間を縫ってカウナスの杉原記念館を訪れている。（右の写真）



彼の執務室（左の写真）や、多くのユダヤ人がビザを求めて列をなしたと言われる裏庭を見学することによって、彼が勇気を持って決断したことの偉大さや、命の尊さを第一と考え、自分の信念を貫いたその人となり、何となく触れることができたような気がした。

記念館を後にし、市内で昼食をとった後、演奏会場であるヴィータウタス・マグヌス大学大講堂へ向かった。

この大学は1922年の設立で、設立当時はカウナスが暫定首都であったこともあり、リトア

ニア大学と命名されたが、後に、元リトアニア大公ヴィータウタスの没後 500 年を記念して現在の名前に改名されたとのこと。

この大学の大講堂は、まるで教会の礼拝堂のように白を基調とした格調高い内装が施されている。奥の正面には本を手を持った初代の学長らしき人物の大きな肖像画が飾られている。来聴者用に会場内に敷き詰められた椅子の数はおそらく 140~150 席ほどだったであろうか。でも、この椅子の数や部屋の広さが全く十分でなかったことをあとになって知ることになるのだが。

暫くして合同演奏曲のリハーサルのために、共演する 2 つの合唱団が到着、大講堂で合流した。この 2 つの合唱団は、共にロンダラス・ダウゲラ氏という一人の指揮者（2009 年にアートディレクターに昇格）より指導を受けている。

リハーサルは順調に進み、リトアニアの曲を 1~2 点指導されただけで短時間で終了した。ダウゲラ氏の情熱的で表情豊かな指揮振りはとても印象的で、MGC の団員の中には、「彼は顔で指揮している。」という人もいた。

リハーサルのあと用意された教室で着替えを済ませて本番を待ったが、本番が始まる 30 分ほど前より来聴者が次々に入り始め、始まる 15 時には会場の椅子席が全部埋まってしまって立ち見（立ち聴き？）客が出る状態になってしまった。

MGC の出番は 3 番目だったので、ゆっくり他の 2 団体の歌を聴こうと思っていたのだが、お客様に座って頂くため我々は講堂の外に出て、入口近くの小さなホワイエのような場所（演奏会終了後ここで懇親会が開かれるため、係員がパーティーの準備を始めていた）で、わずかに空いたドアの隙間から漏れ聞こえる歌声に耳をそばだてて聴くしかなかった。

いよいよ演奏会の幕開けとなったが、冒頭、前日のヴィリニユスに続いて MC を務めてくれている現地ガイドの岸田麻里亜さんより、この日のコンサートがリトアニア独立 100 周年を記念した日本・リトアニア合唱交流コンサートであり、日本とリトアニアの文化交流が盛ん



に行われていることを喜ばしく思うと日本・リトアニア両国語で紹介して頂いた。

一番手として舞台に上がった合唱団はカンティカ（左の写真。正式名称はユワザス・ナウヤリス音楽学校合唱団）。この合唱団は 40 年以上に亘って活動を続けており、現在は、ピアノや音楽理論、

合唱指揮を専門に学ぶ6～12年生（12～19歳）の生徒が所属している。ロランダス・ダウゲラ氏は2006年よりこの指揮を務めている。カンティカ合唱団は、国際合唱フェスティバル「Cantate Domino」、「Caunas Musica Rligiosa」、「Kaunas Cantat」や「学生と世界・歌の祭典」、「歌の祭典」に毎回出演する他、国内外での様々なイベントに出演しているらしい。例えば、2012年には「リトアニア学生歌の祭典」に、2013年には「カウナス学生歌の祭典」に、そして2014年には90周年を記念する歌の祭典に出場している。ただ出場しただけでなく、歌の祭典の期間中に行われたコンクールでは常に1級レベルの評価を受けているようだ。また、2014年にスロヴァキアのブラチスラバで行われたフェスティバルでは堂々の3位入賞、さらに今年、同じくスロヴァキアのナメストフでの祭典では金賞を受賞したとのこと。

この日彼らが歌った曲は、

- ① ヨハン・セバスチャン・バッハ作曲、ハル・ホプソン編曲「神よ、憐れみたまえ」
- ② エドワード・エルガー作曲「アヴェ・ヴェルム・コルプス」
- ③ ジョン・ラター作曲「主は汝を恵みて守り」
- ④ ゲオルグ・フリードリッヒ・ヘンデル作曲「見よ、勇者は帰る」

女性18名、男性3名の構成で演奏してくれたが、とにかく若い。全員十代なので当然といえば当然だが、若いゆえに特に女声のソプラノの、澄んで透き通った声が、穢れのないストレートな音色を奏でてくれる。まさに天使の歌声というに相応しい。

二番手の合唱団はカンターテ・ドミノ（左の写真。正式名称はカウナス聖母マリア被昇天教会混声合唱団）。1992年に前述のロランダス・ダウゲラ氏主導で結成された。



ヨーロッパ中の大きなコンクールにも出演し、多数の賞を受賞しているようだ。その内、グランプリは2回、優勝4回、準優勝4回、3位が6回と、素晴らしい成績を収めている。コンクールのみならず、国内外の多数の音楽フェスティバルにも出演しているらしい。この合唱団のレパートリーは、ユニゾンの民謡から難易度の高い近代曲まで、またグレゴリオ聖歌からボーカル作品に至るまでと、とても幅広い。

今回彼らが歌ってくれた曲目は、

- ① ヴァツロヴァス・アウグスティナス編曲のリトアニア民謡「川の向こう岸に」  
（女性たちが干し草のための草刈りをしながら歌った曲とのこと）
- ② トラディショナル・スピリチュアル「アイム・ゴナ・シング」
- ③ ピョートル・ヤンチャック作曲「アヴェ・マリス・ステラ」

④ ロベルタス・ヴァルナス編曲、リトアニア民謡「鶴が飛ぶ」

⑤ ブランコ・スターク作曲「カンターテ・ドミノ」

女声 12 名、男声 6 名と、カンティカ同様女声中心の合唱団だが、たとえ少人数でも男声はそれを感じさせない声量でしっかりバランスがとれていたように思う。

平均年齢は、カンティカに比べるとかなり上だが、それでも下は 20 代半ば、上は 40 代半ばで、平均 30 代半ばくらいか（西洋人は往々にして実年齢よりも上に見えるので、歳を当てるのは難しい。本当はもっと下かもしれない）。女声はソプラノ・アルトともに、技術的にも音楽的にも洗練された歌唱力で聴衆を魅了してくれた。

驚きだったのは、最初の曲の初めにソプラノソロの一人以外は全員、聴衆に背中を向けて立ったこと。否が応でも聴衆の目はソロの女性に集中する。ソロのパートが終わった後に初めて全員が聴衆の方を向いて歌うのだが、なかなか凝った演出だと思った。

さて、いよいよ我が MGC の出番がやってきた。

舞台の反対側の入口から中央の通路を通って舞台上上がったが、さすがに 2 回目の演奏会ということで、初日ほどの硬さは見られない。しかし、いい意味での緊張感を保ちながら、

- ① 三善晃作曲「光のとおりみち」より「麦藁帽子」と「雪の窓辺」
- ② 西村朗作曲「秘密の花」より「髪」
- ③ 民謡・謡曲シリーズで、「田植唄」、「米搗唄」、「居処」

の順で演奏を行った。（右の写真）



前に歌った 2 団体がとてもハイレベルな歌を披露してくれたことが、かえって我が高齢者合唱団のやる気に

火をつけ、老骨に鞭打たせたのか、心配された民謡シリーズにおいても「田植唄」は躍動感と迫力があり、「米搗唄」の出だしの「ホー、ホー」もきれいに入れ、また、「居処」の足踏みと「ハッ、ハッ、ハッ・・・」の掛け合いもぼっちり決まって、おそらく、今回の演奏旅行の 3 回の演奏の中で一番の出来だったのではなかろうか。やはり、民謡は外国の人には受けがよく、前日のヴィリニユス同様拍手が一番多かった。

演奏終了後、アンコールを求める満場の拍手に応えて最後に「アベ・マリア」を演奏し、MGC のステージを終了した。

アンコールを歌い終わると共演の2団体も舞台上に上がり、3つの合唱団（岸田さんは「国際



合同合唱団」と紹介してくれた)による日本、リトアニアそれぞれの国の歌を合同演奏した。(左の写真)

日本の曲は磯部俣作詞・作曲の「遙かな友に」、リトアニアの曲はクサヴェラス・サカラウスカス・ヴァナゲリス作詞、ユワザス・グダヴィチユス作曲の「Kur Giria Zaliuoja」、*“青々とした森のあるところ”* という意味だそうで、リトアニアで最も愛されている

曲の一つである。「遙かな友に」では、他2団体が完璧に歌をマスターしていただけでなく、とても正確な日本語で歌ってくれたのには感激した。よほど時間をかけて練習してくれたのだろう。最後にリトアニアの「Kur Giria Zaliuoja」を歌い終わると会場からは割れんばかりの拍手が起こり、なかなか鳴りやまない。おぎなりの拍手ではなく、本当にこの日の演奏会を楽しんでくれたのだとわかる、心温まる拍手であった。日本から遙か遠いこの地を訪れ、リトアニアの人々の前で歌を歌えて本当よかったと心から思った瞬間であった。

来場者が会場を去ったあと、3つの団体による交歓会が始まった。

カンティカの団員が全員未成年者ということもあり、この日はアルコールは一切なし。これにがっかりして、酒がないから今日は大人しくしてるぞと言っていた我が団のお酒飲みの方々も、いざ会が始まると積極的にカウナスの団員に話しかけておられた。前日のヴァルパス（ヴィリニユス）の団員に比べ、カウナスの2団体は英語を話せる人が多く、その分会話も弾んでいたようだ。私もカンティカの17歳の青年と親しくなり、彼に促されてフェースブックの友達になった。私は、フェースブックは初心者で友達登録のやり方も知らなかったが、さすがにITリテラシーの高いバルト3国の若者だけあって自分のスマホと私のスマホを操作してあっという間に登録を済ませてくれた。その後、帰国までにカンティカの他の団員からも何人か友達リクエストが来て、それぞれ友達登録させてもらっている。



宴もたけなわになると、恒例により各団体による合唱の交換が始まった。カウナス側で歌ったのはほとんどがカンターテ・ドミノの団員だった。演奏時は聖職

者のようなコスチュームのせいで何となく近寄り難いイメージだった彼らだが、交歓会では多くの団員が普段着で参加しており、急に身近に感じたのは私だけだろうか。しかし、一旦歌を歌い始めるとやはりその歌唱力は圧巻で、あらためて彼らのレベルの高さを思い知らされた。(前頁の右下の写真)

既に他の MGC 参加者より紹介があったように、この席上で、アートディレクター兼指揮者のダウゲラ氏より、「我が合唱団は男性の数が少ない。MGC は総勢 60 人と聞いた。であれば、この中の 10 人程度がカウナスにとどまって我が団で歌ってくれればと助かる。」などと心憎いジョークを言って我々を喜ばせてくれた。

このような楽しい、打ち解けた雰囲気の中で懇親会もお開きとなり、僅か一日で親しい友人同士となったカウナスの合唱団との別れを惜しみつつ、我々は会場のヴィータウタス・マグナス大学大講堂をあとにし、ホテルに帰っていった。

翌朝はバスで次の目的地であるラトビアのリガに移動するが、リトアニアでの 3 日間、ガイドを務めてくれた岸田麻里亜さんはカウナスでお役目が終了、その日のうちにヴィリニウスに戻るといので、急遽参加者を募ってホテルのレストランで彼女の慰労会を行った。3 日間本当にお世話になった岸田さんへ心からの感謝の気持ちを伝えると同時に、カウナス名物の白ビールを飲みながら大いに盛り上がったことをお伝えしてこの日のレポートの結びとさせて頂きたい。

以上

カウナス紀行文担当 : T2 深堀清隆